

カリフォルニアの運転免許

「神戸さん、運転免許を早く取得してください」

駐在員としてアメリカに赴任して二カ月が経過した頃、経理担当のK君が言った。

「今、引継ぎで忙しくて、勉強する時間がとれないんだけど」

英語が得意でなかった私は、引継ぎの多忙さを理由に引き伸ばそうとした。

「これ、運転免許の問題です。一晩徹夜して暗記すれば、合格できますよ」

K君は私の答えを見透かしたように答えながら、大形の封筒を渡してきた。中を見ると、横二〇センチ、縦四〇センチ程の大きさの用紙が、五枚入っていた。

運転免許用、学科試験の問題用紙であった。カリフォルニア州では、運転免許試験は学科と実技があり、学科は三択の問題が二〇問で、七〇点以上で合格だ。日本と違うのは、受験した試験問題を採点した後、返却してくれることであった。五種類の問題用紙があるが、一〇人ほど受験すると、全ての問題が集まるといいう。これを渡してくれたのだった。

駐在する直前、明石の運転試験場へ行って、免許更新の繰り上げ手続きと、国際免許の取得を行った。このため、一年間、外国での運転が可能であった。

しかし、K君によると、国際運転免許は旅行者のための免許で、事故率が高く、保険料も高いという。保険料は会社が負担していたので、経理担当者としては、経費節減の面から保険料が安い、現地（カリフォルニア州）の運転免許を早く取って欲しいとの事であった。

アメリカに着任してからは、しなければならないことがたくさんあった。住居は引継ぎ者T君の借りている家に転がりこんだ。引継ぎ期間は三ヶ月と決められていて、引継ぎ期間を延ばす事はできなかった。三ヶ月の間に仕事を覚えると共に、生活環境を整えなければなかった。仕事は初めてのことで、帰宅は毎日十一時を過ぎた。

六ヶ月後には家族が来る予定だった。T君は単身赴任だったので、そのまま家族で住むには狭かった。それに、子供の教育を考えると、教育レベルの高い学校に通える地区に、家を探す必要があった。休日には、周辺にあるスーパーマーケットや日本食の店、ガソリンスタンド、学校や、銀行のATM等、生活に必要な場所を覚えるため、周辺を走り回った。一週間分の食料の買出しも、しなければならなかった。運転免許の勉強は本当に、一夜づけでなければできないようであった。

車の運転は、会社の行き帰りT君の車で練習することにした。私達は、アメリカ西海岸、最南端の都市サンデエゴの少し南、メキシコとの国境沿いの町に住んでいた。どこに住んでいても、住宅団地から出ると時速七〇キロで走れる道路につながっており、その道を一〇分ほど走ると、フリーウェイに乗ることができた。フリーウェイは無料で、道路幅は広く、一車線の幅は日本の道路の倍はあり、走り易かった。

問題は左ハンドルの、右側走行であったが、そう難しいことではなかった。ただ、交差点で左折したとき、日本にいた時の癖で左側に入りそうになった時が二度ほどあった。そんな時、助手席に乗ったT君は、大きな声で、
「右右右」

と叫んだ。そして、
「死ぬかと思った」

と大げさに言った。

家と工場の往復は一週間ほど練習すると、道も覚えスムーズに運転できるようになった。

あとは、日本との交通規則の違いを覚える必要があった。英語が今ひとつわからなかったのも、何か日本語で書かれた交通規則の資料がないかとK君に聞くと、解説書らしきものを準備してくれた。それによると、日本の交通規則と違うのは、

○踏切には信号が付いており、日本のように一旦停止の必要がない。

○交差点で信号が赤の時でも、安全が確認できる時は右折できる。（表示があるところのみ）

○スクールバスが、ストップランプを点滅し停車している時は、追い越しをしてはいけない。

○一車線の道路で、自分の後ろに五台以上の車が付いたとき、車を道路沿いに寄せ、先をゆずらなければいけない。が主なものであった。

道路標識は、一旦停止、駐車禁止、車両進入禁止等ほとんどが日本と同じだった。最高速度表示はマイルであったが、自動車の速度計もマイル表示であったので、違和感はなかった。

少し生活に慣れてくると自分の車が必要になってきた。いつまでも友人の世話になっていくわけにはいかないので、車を買うことにした。

独身のH君は車好きで、五リットルのアメ車に乗っていた。アクセルを踏むと、体がシートに沈みこむような感じで加速した。しかし、ガソリン代が高い、高いといつも愚痴をこぼしていた。

H君のようにアメ車に乗りたい誘惑

もあった。しかし、費用と、トラブルの点から日本車を購入する事にした。ただ三年の駐在期間中に七、八万キロメートルは走りそうだったので、思い切って新車を購入した。

いつまでも引き伸ばせないのも、運転免許の受験をする事をした。受験勉強をする時間がなかったから、K君の言う通り徹夜の一夜づけをすることとした。五枚の問題用紙を整理すると重複した問題があり、整理すると六〇問ほど暗記すればよかった。朝方五時まで勉強し、眠い眼をこすりながら、試験場に行った。カリフォルニアではどの都市にもDMVと呼ばれる交通行政機関がある。日本でいうところの運転免許試験場と陸運局を合わせ持ったような施設であった。

受付で一〇ドルを支払い、受験表を持って、指差されたところに行った。

そこは、建物の隅で二面が壁、二面が高さ一・二メートルほどのカウンターで仕切られていた。カウンターの一角が入り口となっており、その先の机に、試験官らしき女性が椅子に座っている。広さは二〇畳ほどで、中に小さいテーブル付の椅子が二〇脚並べてあった。壁には幅三十センチ程の棚が付いていた。すでに一〇人程の人が受験していた。椅子に座って受験している人もいたし、壁際の棚に肘を付き立ったまま受験していた人もいた。

中に入り試験官に受験票を渡すと、長い試験用紙を渡してくれた。どこに座っても良い、制限時間も決められていないという。空いていた椅子に座り、問題を見た。徹夜で覚えた問題だった。一通り最後まで回答していくと七〇パーセントはすらすらできた。二度目、三度目と見直しながら回答した。

前を見ていると、解答を終えた受験者が用紙を持って試験官の所に行って採点をしてもらっていた。新たに受験しに来る人もいた。受験時間も自由に座ったかと思うとすぐ試験官のところに行く人もいた。試験官は時々受験者の間を見て回った。日本では考えられない方式であった。三〇分ほど考えて、これ以上考えても無理だと思ったので席を立ち試験官の所に行った。

問題用紙を出すと、試験官は回答用紙を出し私の用紙と見比べながら、採点していった。試験官が、丸もバツも付けないので間違っているのかと心配したが、そうではなかった。正しい所は何もつけないで、間違っている所は、三択の升目の正しい所にチェックを入れた。採点し終わると、

「おめでとう合格です」

と言って、試験用紙を返してくれた。ほっとした。八五点だった。

学科試験に合格すると、免許証用の写真を撮り、実技試験日の予約をした。

実技試験は自分の車で行く。試験場に車を持ち込み、試験官を助手席に乗せ、市街地を試験官の指示するとおりに走るのであった。

その年の年末、妻と子供達が来た。私が高齢者の生活に慣れる必要があったのと、子供の学期の区切りよい時期を選んだ結果であった。

ちょうどクリスマス休暇であったので、翌日から、生活するための全てを妻に教えた。

スーパーの場所と買物の方法、ATMの場所と使い方、ごみの出し方、ガソリンの入れ方等。中でも車の運転は最も大切な事であった。

妻の車は、グループ会社の駐在員が帰国するので売りに出ていたのを買った。

エンジン音が少し高く、走行距離も五万マイル（約八万キロメートル）と多かったが、日本車でまだまだ手入れなしで走れそうであった。

妻は、車の運転にはすぐになれた。フリーウェイもぶんぶん飛ばした。日本にいたときは高速道路を走行する機会は少なかったが、フリーウェイを高速で走るのが好きであったことを初めて知った。

土曜日、子供が行く日本人学校はフリーウェイを最高時速五五マイル（約時速九一キロメートル）で飛ばしても一時間はかかる遠方で、土曜が必ず休みでなかった私にとって、送り迎えを喜んで行ってくれる妻は頼もしかった。

そんな妻が、運転免許の学科試験を受験しに行った。夜、帰って結果を聞くと、一〇〇点満点だったと言う。

「それは良かった。良かった」

妻には、K君がくれた試験問題をコピーして日本に送っていた。渡航準備をしていた妻は、これを必死で勉強したらしい。

「それが大変だったのよ」

妻が言うには、試験を終え、採点して一〇〇点だったと分かった時、試験官は、英語が片言しか話せない日本人が、満点を取れるのはおかしい。カンニングをしたのではないかと疑った。彼女は机の引出しから、一枚に一つの問題が書かれたシートを取り出し、妻に答えを求めた。試験問題と同じ問題だったので、正解すると、次から次にシートを出してきたという。妻は全てに正しい答えをしたので、カンニングの疑いは晴れたという。